

例えばこんなふうに…

見えるーぺの使い方

ガイドブック

「何となくイメージはわかるけど、
実際にどうやって使えばいいのか
もう少し教えてもらえれば…」

そんな声もあるかもしれません。

ここでは具体的な使い方や
使用する際のポイントなどについて
まとめてみました。

■「予想する」場面で

学習問題を設定する前や学習問題を考えていくときに、子どもたちが「予想する」場面は多々あると思います。そんなとき、子どもたちはこれまでの生活経験や学習経験に基づいて考えを生み出そうとします。

教科書の資料などから「どうして平安時代には日本風の文化が生まれたのだろう？」という問いが設定されたとしましょう。子どもたちは次の予想を立てました。

どうして平安時代には日本風の文化が生まれたのだろう？

みんなの予想

- ①中国とか朝鮮半島で何かあったのでは？
- ②これまで色んなことを教えてくれた渡来人が来なくなったり、日本にいなくなったりした？
- ③資料には貴族みたいな人たちが多く描かれているから、貴族たちが何か関係している？



子どもたちのこうした予想を実際の授業で、どのように扱われているのでしょうか？

例えば…



みんな、これまでのことや資料をよく見て考えましたね。
もしかすると、この中に正解もあるかもしれませんね。
それでは調べていきましょう

こんなふうにして授業を進めているケースは少なくないかもしれません。
もちろんこれが間違っているというわけではありません。

ただ、予想することを、事実を調べていくステップにするという意識だけになってしまっていると、少しもったいない気がします。

大人でも未知の問いに対して予想する際、多様な視点を働かせて検討しているケースは多くあります。
意識的か無意識かは別にして、これは子どもであっても同じです。

板書にある子どもたちの予想①～③はどうでしょうか。
子どもたちの思考の過程で、どんな視点が働いていると見取ることができそうでしょうか。

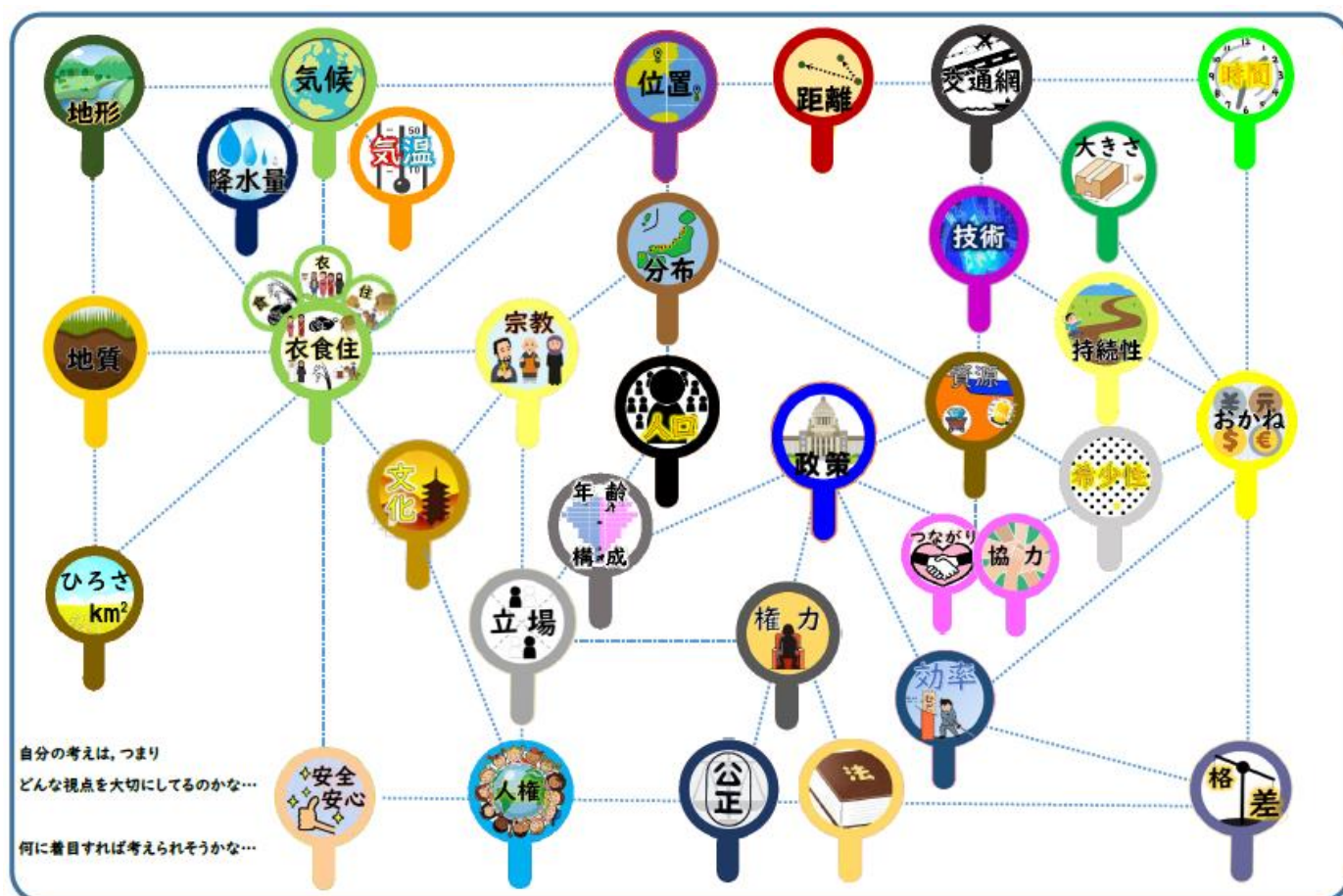
問い：どうして平安時代には日本風の文化が生まれたのだろうか？

- ①中国とか朝鮮半島で何かあったのでは…
- ②これまで色んなことを教えてくれた渡来人が来なくなったり、日本にいなくなったりした？
- ③資料には貴族みたいな人たちが多く描かれているから貴族たちが何か関係している？



“どんな視点”と言われても…

そうですね。実践でも、指導者が子どもたちの思考の過程にある視点を見取することは難しかったのです。そこで用いたのが「見えるーぺ」です。



例えば①の「中国や朝鮮で何かあったのでは…」という予想は、平安時代に日本風の文化が誕生した理由を「外国との“つながり”」に着目して考えようとしたものと捉えることができそうです。

②の予想「これまで色んなことを教えてくれた渡来人が来なくなったり、日本にいなくなったりした？」も同じです。①と②も、日本風の文化形成の背景には外国とのつながりが何か関係しているのでは…という予想だということです。

ただ、これはおそらく、発言した本人たちでさえ自覚していないと考えられます。

それを、見える一ぺを使って

「なるほどなるほど、〇〇さんも□□さんも、
平安時代の日本でこうした文化が誕生したわけを、外国との
着目して考えようとしたんですね」
たしかに外国とのつながりが文化に影響を与えたのかもしれないね」



に

というように、可視化しながら価値付けます。
そうしたことを繰り返すことで、



「外国とのつながりに着目すれば、文化を予想できそうだ」
「文化に着目することで、外国とのつながりが見えてくる場合がありそうだ」



という、対象を捉える際の視点の自覚化と、更なる場面での発揮を促すというわけです。

別の言い方をすれば、平安時代の学習を通して、
イラストにあるような汎用性のある一般化された知識の習得と発揮を促すといえるかもしれません。

どうでしょうか。
日常的に行っている「予想する」という学習活動も、
指導者が別の目的意識をもつことで、冒頭の



みんな、これまでのことや資料をよく見て考えましたね。
もしかすると、この中に正解もあるかもしれませんね。
それでは調べていきましょう

とは、随分と違った働きかけができそうではないですか？

実践された先生からは、

- ・子どもたちの意見を見取る引き出しが増えた
- ・子どもたちの意見を即座に価値付ける支援ツールになった

という声もありました。

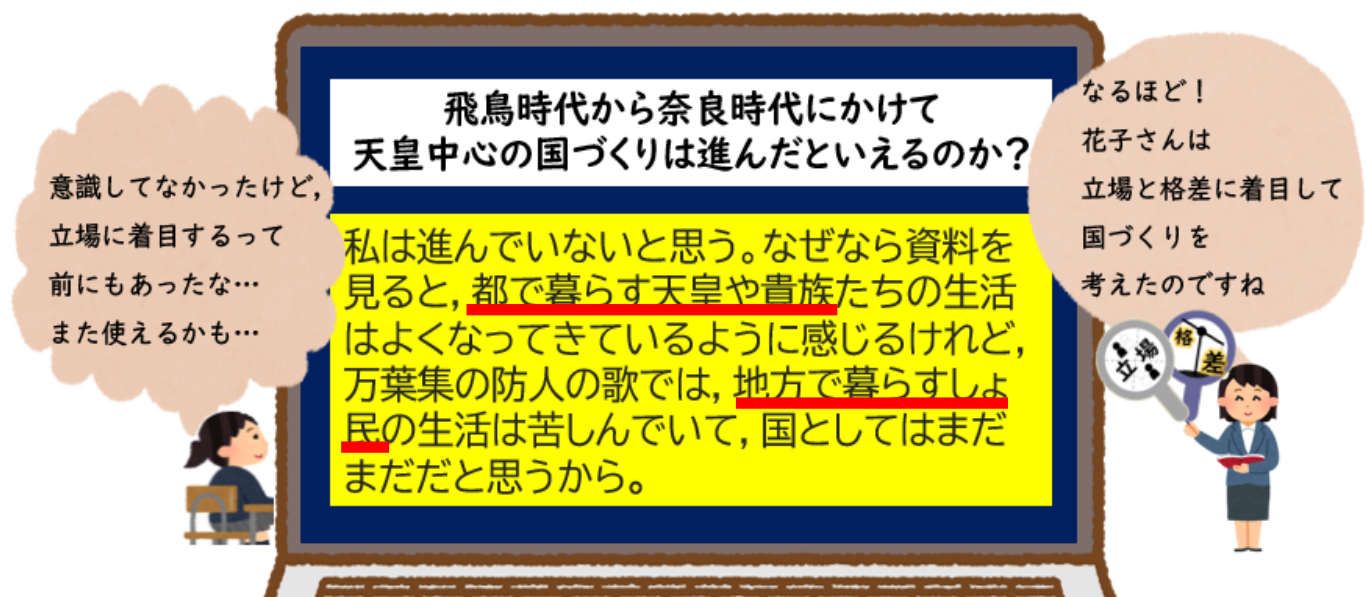
■ 事実に基づいて選択・判断する

多様な解が想定される問いに対して、「自分はこう判断する」という考えをまとめるという活動は社会科のみならず、多くの教科領域で行われています。

実践の多くは、根拠や理由を明確にして論理的に表現する力を育むという目的があったりしませんか。

そうした目的に加えて、

ここでも「多面的・多角的に事象を捉える力」も育む という目的意識が指導者にあると…



というように、どんな事実を根拠にして考えたのかということに加えて、無意識に発揮している視点も価値付けることができます。

これは小学校6年生の実践でしたが、

すでにその段階で、（無意識かもしれませんが）

「国づくりには、様々な“立場”の人たちが“格差”のない暮らしができることが大切だ」という認識を生活経験や学習経験の中でもっていると言えそうです。

論理性を育むということに加えて、

イラストのように可視化しながら価値付けて自覚化を促していくことで、

中学校にいても、“立場”や“格差”に着目して

政治や経済などの単元で扱われる事象を捉えていくことができるのではないのでしょうか。

なお、いつも指導者が見える一ぺを使って価値付ける必要はありません。

実践では、子どもが発言した後、下の写真のように教室の前に掲示してある一覧から選択を促したり、



それってどういう視点から考えたの？

下にあるように、学習支援ソフトの機能を用いて、
まとめや振り返りの場面で、
自他の考えを自分たちで価値付けることを委ねたりすることも大切です。



はじめと終わりを比べて

はじめは民主主義・民主政治の言葉から国民に改善点がたくさんあり国民同士のつながりが大切であると思っていた。しかし、政府側にももちろん課題があり、お互いの課題をよりよくするには国民と政府が常にそれぞれの出来ることを積極的にしていき、協力、補いながら政治を進めていく必要があることを学んだ。一票の価値についての問題や比例代表のしくみについて始めて知ったこともあったが、立場という視点をもっていれば、ある程度予想できていたように思う。



繰り返していくと子どもたちは、
予想した後や考えをまとめた後から
見える一ぺを用いて価値付けるだけではなく、

考えを生み出す前に
見通しを立てるために見える一ぺを活用し始める子どもたちが
小学校でも中学校でも確認できました。
そうした子どもたちの変化や成長の見取りにも役立ちます。

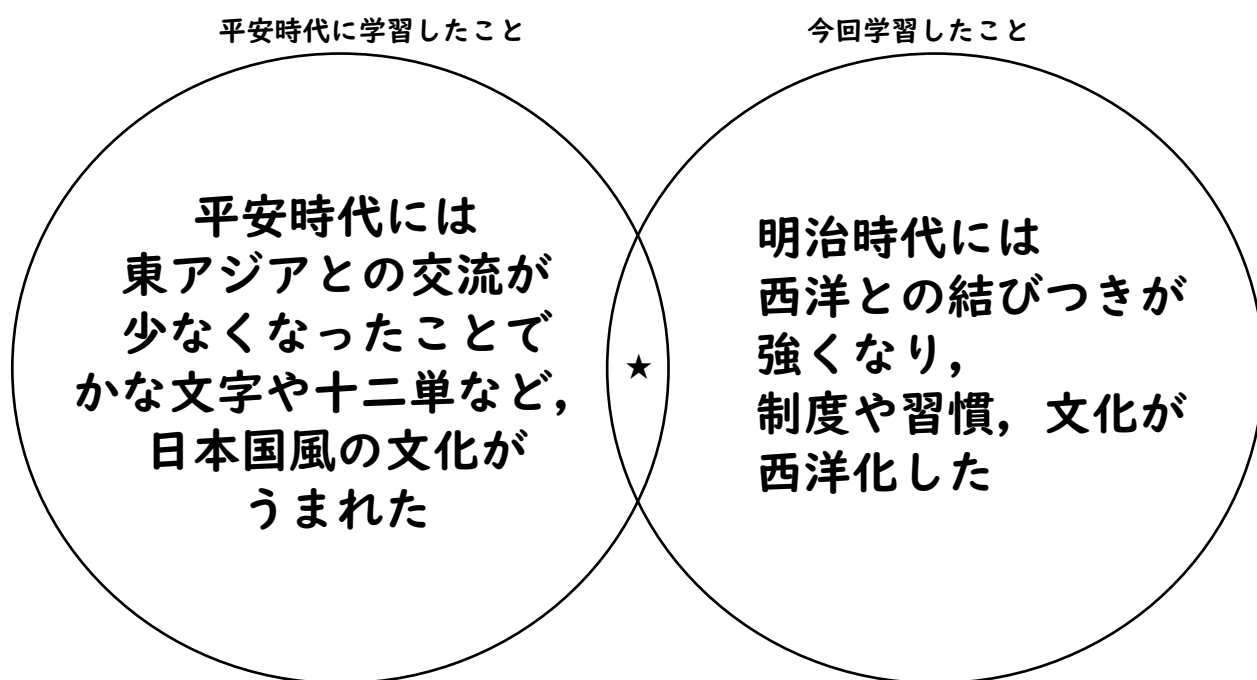
学習支援ソフトの機能を用いて指導にあたった先生からは、こんな声も聞かれました。

子どもたち自身が自分の考えを俯瞰して、データ上で見える一ぺを動かして貼り付けておくだけで、
時間がないときでも、ちょっとした振り返りになるし、この繰り返しで“次の単元でも、他の視点はないかな…”
というように、子どもたちが多面的・多角的に考えることを意識して取り組むために大切だと感じた。

■比較して共通性を見いだす

複数の情報を比べて共通するところや異なるところを整理する活動も日常的に行われています。それらの学習活動を位置付ける理由は様々ですが、本研究では、やはり「多面的・多角的に事象を捉える力」を育むという目的意識を大切にします。

授業の中で、これまでの学習と今回の学習を比べて共通性を見い出す学習活動を位置付けたとしましょう。



上のベン図の真ん中★には、どんなことが共通しているかな？
見える一ぺから選んでみて

と促すと、子どもたちが一覧の中から



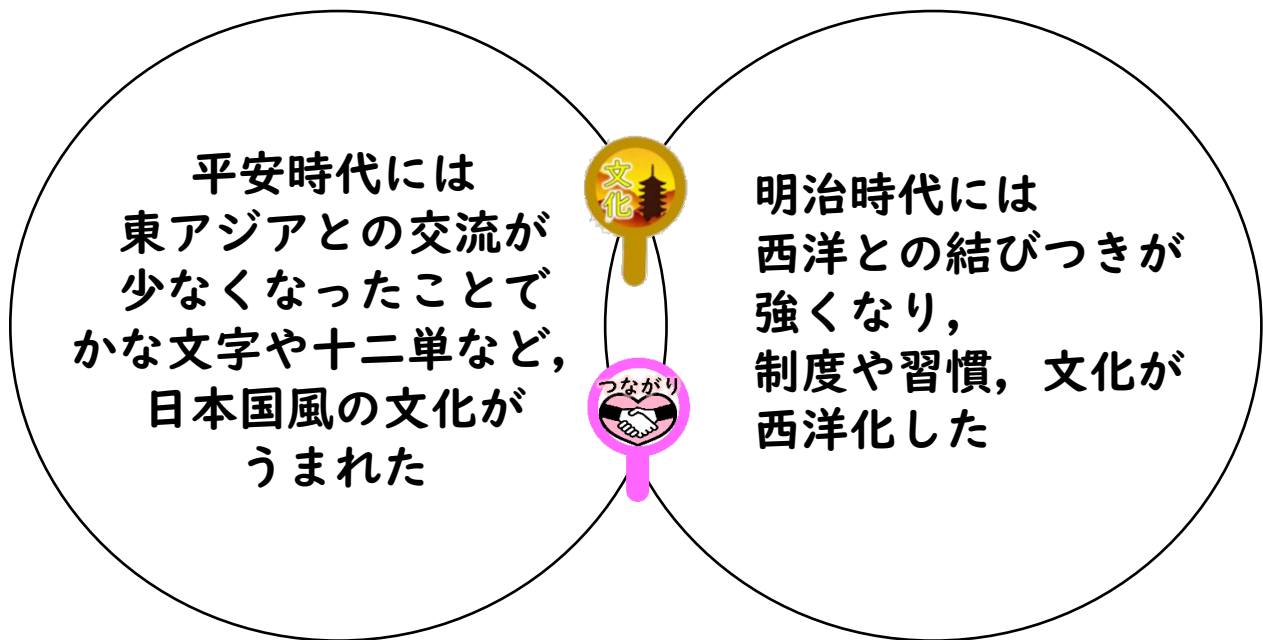
といった見える一ぺを選択することは、さほど難しいことではありません。

ですが、そうだとって

ベン図の真ん中に「文化」と「つながり」という見える一ぺを、単に可視化して貼り付けたところで、子どもたちの反応は「…だから何？」というように、多面的・多角的に事象を捉える力に資する効果は期待できないでしょう。

ここで大切なのは、

ベン図の真ん中に貼られた見える一ぺにはどのような意味があるのか、指導者が価値付けることです。



ベン図の真ん中に貼り付けた見える一ぺに
どんな意味があるのか価値付けるといわれても…

コツは、共通性として見いだされた見える一ぺ同士を関連付けるのです。

例えばこんなふうに…

どちらの時代の文化にも外国とのつながりが関係してるってことだね。
時代の文化って外国とのつながりが関係することがあるんだね。
文化に着目すると、外国とのつながりが見えてきたり、逆に
どんな国とつながっているかに着目することで、その時代の文化が予想できたりするかもしれないね。

見いだされた共通項としての見える一ぺを、このように指導者が価値付けることによって
事象を捉える際の視点につなげていくのです。

「いや、そこを指導者が価値付けるのではなく、子どもたちに気付かせたいのだけど…」
そんな声もあるかもしれません。もちろん子どもたちの実態に即することが大切です。

しかし、2つの具体的事実の共通性をもとに、
一般化した知識や対象を捉える視点にしていく思考は、多くの中学生にとっても難しいことでした。

ここは子どもたちに委ねるというよりは、指導者による価値付けが必要だと感じたところです。



なるほどなるほど…。
だけど、いつもこんなふうにうまく関連付くものなのかな…

いや、自然にうまく関連付くわけではありません。

うまく関連付くように、

「どんな事象とどんな事象を比べることによって、何が見いだされるのか」

「一見異なる事象でも、本質的に同じことは何か」

指導者が見極めて意図的に活動を位置付けなければなりません。

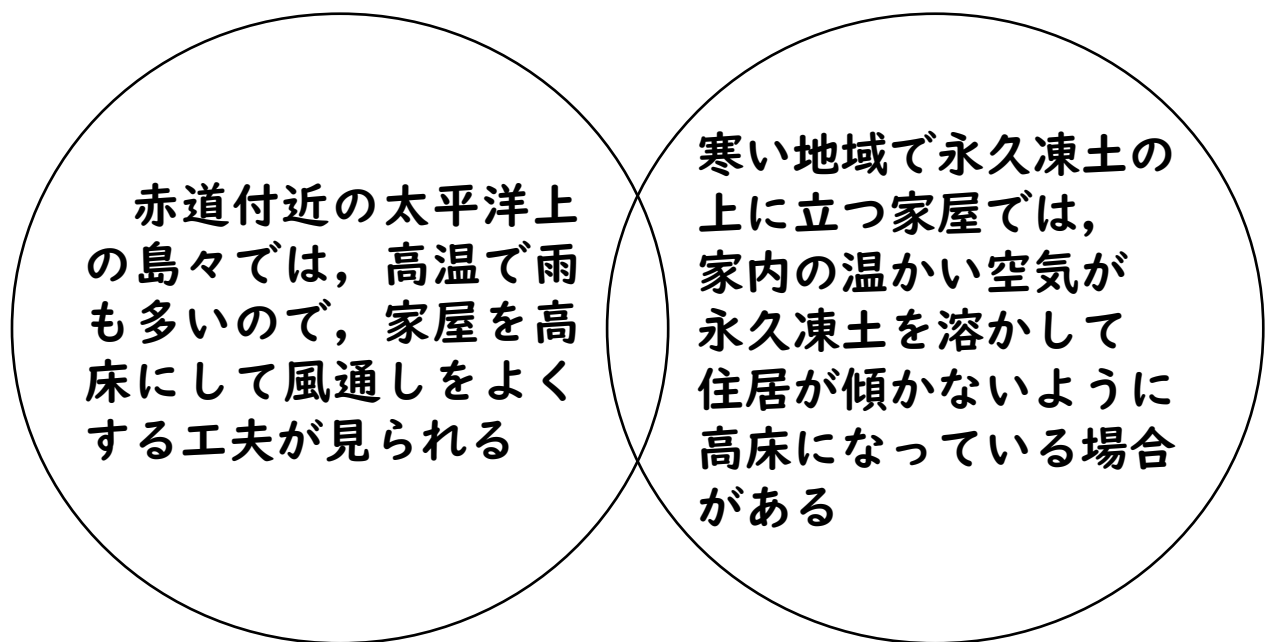
ここは指導者の技量が必要になります。

とはいっても実践をされていて、

「単元は違っても結局ここも同じだな…」というところはありませんか？

まずはそういうところに着目して、実践されてみてはいかがでしょうか。

わかりやすい例を一つ紹介しておきます。



さて、どんな見える一ぺがベン図の真ん中に貼られ、

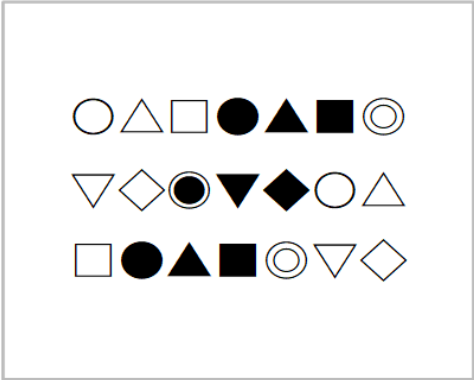
それをどのように価値付けるでしょうか。

ぜひ考えて、実践に生かしてみてください。

なお、この例に示した内容としては、

5年生や中学1年生でも実践可能です。

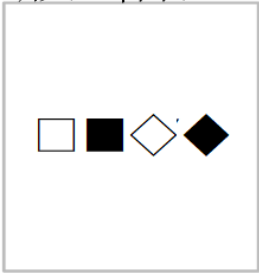
■情報を分類する



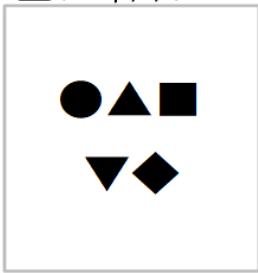
たくさんの情報

分類してみよう

形に着目…



色に着目…



複数の情報を分類するとき、その人なりの視点が働きます。上の例では形や色という視点で分類されていますが、実際には多種多様な分類の仕方があります。

情報を分類して整理する学習活動を位置付ける際に、見える一ペをどのように用いればよいのか、その留意点についてまとめておきたいと思います。

庄内平野ではどのようにしておいしいお米を
たくさんつくっているのだろう？

- ・冬に雪がふるのでたくさん水を使えそう
- ・広い平らな土地と最上川があるから
- ・広い分大きな機械を使って効率よく作れそう
- ・昼と夜の気温差も関係してそう
- ・農業とか品種改良の研究も行われているから

単元冒頭で設定された問いに対して、子どもたちが発表した予想です。

「これらの予想を分類してみましょう」といってもやり方は様々考えられます。

子どもたちが自由に分類するというやり方や見える一ペを用いて分類するというやり方もありますね。

どちらのやり方にも一長一短はありますが、
どのやり方で授業を進めればいいのでしょうか。

例えば

- ①拡散してもいいから、とにかくたくさんの視点を出し合って自分なりの見える一ペを見つけてほしいと考えるのならどちらがいいのか。
- ②地域の気候や地形の特色を生産者が利用したり克服したりすることによって農作物の生産は行われていることに気付けるようにすることが目的であれば、どちらの方がよさそうか。
- ③社会科の見方・考え方につながるような視点を習得させる段階であればどちらがいいのか。

というように目的や学習状況によっても変わります。

5年生の実践では②や③を考慮して

提示した見える一ペの範囲内で情報を分類・整理して、
気候や地形、技術、人々の努力や工夫などの関連性を明らかにしていききました。

見える一ペを用いることで、働かせようとする視点に制限はかかります。

そこには良さもあれば課題もあります。

必要に応じてご使用いただければ、これまでの指導の幅がより広がるのではと思います。

ぜひ、ご自身の授業改善や校内、中学校ブロックの授業改善促進ツールに役立てていただければと思います。

